

大豆近況 VOL.155

団体会員
一般会員 各位
賛助会員
協賛企業

関係部署にご回覧ください。

令和3年10月8日
一般財団法人 全国豆腐連合会
会長 東田 和久
相談役 郷 和平

「大豆近況」をお届け致します。是非、ご活用下さい。

○北米産大豆

米国農務省より9月10日に発表された2021/2022年度の世界の大豆生産高予測は、米国産・EU産の増加数量がカナダ産の減少数量をやや上回り、前月比0.2%増加の3億8,442万トンとなりました。また、生産高がやや増加し需要量が減少したことで、期末在庫は前月比2.8%増の9,889万トンに上方修正されました。米国産につきましては、単収が増加見込となり2021年産生産量は前月比0.8%増加の1億1,904万トンに上方修正されました。また、生産高等の供給量の増加が輸出等の需要量の増加を上回り、期末在庫は前月比19.4%増の503万トン(在庫率4.2%)となっています。

また、同省により9月27日に発表された9月26日現在の米国主要生産州の大豆落葉率は75%(前年72%、平年66%)、大豆収穫率は16%(前年18%、平年13%)、作柄概況は良好・優良で58%(前年64%)となっており、概ね平年並みの進捗で推移しているものの、中西部北部での乾燥天候による影響が見られる状況です。

一方でカナダ産につきましては、カナダ統計局が7月現在でまとめた2021年産大豆の生産量予測によると、前年比8.4%減の580万トンになる見通しとなっており、単収低下による収量の減少が減産の要因とされています。主要生産州の生産量につきましては、オンタリオ州は1.6%減の380万トン、ケベック州は8.0%減の110万トン、マニトバ州は30.8%減の80万トンとされており、いずれの州も単収低下が見込まれている中、マニトバ州での乾燥の影響が特に大きい様子です。9月中旬～下旬にかけて一部地域では収穫作業が始まっており、これから収穫作業が本格化していくため、良好な天候であることが望まれます。

9月のシカゴ相場は期近限月で12.80ドル付近から始まりました。月初はハリケーン「アイダ」によりメキシコ湾岸の輸出拠点に被害が出たことから穀物大手のターミナル施設が稼働停止になり、輸出停滞による在庫のたぶつきを警戒する売りや、中国向けの新規輸出商談が連日公表されたことによる買いで交錯していたところ、10日の米国農務省発表での生産量の増加見込

が市場予想を下回ったことから増産見通しは限られるとの見方が広まったことで買いが進み13.00ドル近くまで値を上げました。その後は作柄報告の改善により12.60ドル付近まで下げたものの、米国株や原油相場の上昇による連れ高や中国の輸出商談の公表が買い支え、現地9月29日現在では12.80ドル付近まで戻しております。

為替相場は1ドル=110円付近から始まりました。前半は1ドル=110円前後で推移していたものの、中国不動産大手の中国恒大集団の経営不安を背景に低リスク通貨の円が買われたことで一時1ドル=109.20円付近まで円高が進みました。その後米連邦公開市場委員会(FOMC)で2022年にゼロ金利政策を解除する見通しを示されたことで早期の金融引き締め観測により米長期金利が上昇し、日米金利差拡大を年掛かりにした円売り・ドル買いが優勢になったことで円安が進み1ドル=112円台の動きを見せつつ、9月30日現在では1ドル=111.90円付近で推移しております。

○国産大豆

令和3年産国産大豆の生育状況につきましては、北海道産においては7月～8月にかけての高温に影響された地域が一部で見られるものの8月以降の天候回復により概ね順調に推移しており、一部地域では収穫作業が始まっているところもあるようです。本州につきましては、東北地方：夏場の雨の影響が見られたものの概ね順調に推移しており、一部で豪雨による被害があった昨年に比べ収量は増える見込、関東・北陸：天候不順により一部播種遅れが見られたものの概ね順調に推移、東海・滋賀：夏場の雨の影響で一部で播種遅れや倒伏、生育遅れが見られるとのことです。また九州につきましては、台風や豪雨の影響で作付地に被害が出ており、まだ不透明ではあるものの一定の収量減は避けられないものと考えられます。

今後は各地で収穫作業が本格的に始まってくる時期であるため、順調な天候に恵まれることが望まれます。

以上